

(公財)日本体操協会 総務委員長 遠藤 幸一

最高の舞台オリンピック・リオデジャネイロ大会へ、「体操競技」「新体操」そして「トランポリン」のすべての種別において選手を送り込んだ体操ニッポン。今回は、その戦いぶりを振り返ってみたい。

●男子体操

男子体操、3大会ぶり7度目の団体金メダル

世界選手権では2009年から負けなしの個人総合6連覇を達成し、世界中から「キング」と称される内村航平を擁する日本は当然ながら優勝候補筆頭。チームメンバーもオリンピック経験者が5人中4人、さらに昨年の世界選手権団体優勝メンバーを揃え、盤石の体制で予選を迎えた。しかし、予想に反し、内村の鉄棒の落下など、チーム内でミスが重なり、想定外の4位となった。

周囲が本当に団体金メダルを獲得できるのか、不安をぬぐえないまま迎えた団体決勝。前回大会からその雪辱を誓う

チームは、全員で支え合うチームへと変わっていた。最初の種目あん馬において山室光史が落下したが、次の加藤凌平が見事にカ



パー。跳馬で白井健三が着地をピタリと決めると波に乗った。予選とは大きく気持ち切り替え、自信に充ち溢れた田中佑典の演技は、本調子ではない内村の背中をしっかりと支えた。結局、2位ロシアとは2.641の大差で3大会ぶり7度目の団体金メダルを獲得することになった。

団体決勝の死闘を終えて翌々日に控える個人総合連覇の偉業を前に内村の心身の疲労はピークを迎えていた。内村の場合、予選、団体決勝と全6種目をこなしたことで、他のライバル選手たちよりも、その消耗度は想像を超えるものだった。なんとか我慢の演技を続け、決して悪くない得点を重ねていた内村だったが、序盤から素晴らしい演技を続けるウクライナのベルニャエフがトップで最終種目の鉄棒へ。結局、内村が最高の演技を見せたのに対し、トップに立つベルニャエフが着地で動くなどして得点を伸ばさず0.099の僅差で逆転優勝を決めたがどちらが勝者でもおかしくない歴史的な名勝負だった。



オリンピック・リオデジャネイロ大会における体操ニッポンの主な成績

■男子体操競技 (金メダル2、銅メダル1)

【選手】内村航平、田中佑典、加藤凌平、白井健三、山室光史
団体総合：1位(予選4位) 個人総合：内村1位、加藤11位
種目別：〈ゆか〉白井4位、内村5位 〈跳馬〉白井3位 〈平行棒〉加藤7位

■女子体操競技

【選手】杉原愛子、寺本明日香、宮川紗江、村上茉愛、内山由綺
団体総合：4位(予選7位) 個人総合：寺本8位、村上14位
種目別：〈ゆか〉村上7位

■新体操

【選手】〈団体〉杉本早裕吏、松原梨恵、畠山愛理、横田葵子、熨斗谷さくら
〈個人〉皆川夏穂
団体：決勝8位(予選5位) 個人：予選16位

■男子トランポリン

【選手】伊藤正樹
棟朝銀河
個人：〈個人決勝〉
棟朝4位(予選7位)
伊藤6位(予選6位)

■女子トランポリン

【選手】中野蘭菜
個人：中野予選13位

●女子体操

脚力種目で手ごたえを感じた女子体操

7月8日の常務理事会において、強化本部長の体調面を考慮してその派遣を中止し、リオデジャネイロ大会には初めて監督代行を立てて参加することを決めた。前回大会を経験した寺本明日香以外、全員がオリンピック初出場だったこともあり、指揮官不在の影響も心配されたが、選手たちは気後れせず、堂々とした姿

勢で演技を楽しんだ。その中であって、脚力の強さがカギになるゆかと跳馬の競技力が日本は高い。団体決勝のゆかではチーム得点で3位。1966年以降遠ざかっている団体メダル獲得に向けて、一筋の光の見える結果であり、全種目を通じたレベルアップを期待したいところだ。

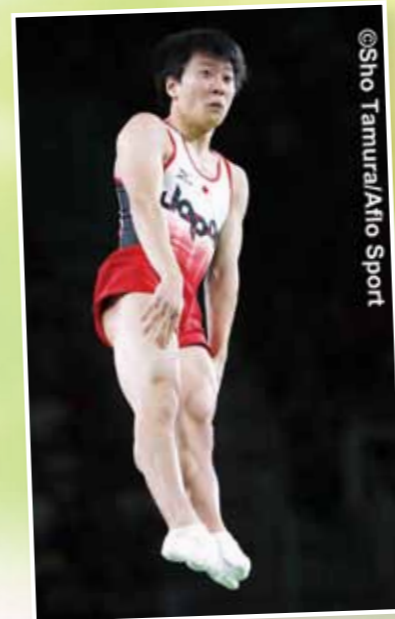


フェアリージャパンPOLA団体のチームは、2015年の世界選手権種目別リボンで銅メダルを獲得し、オリンピック初のメダル獲得が見えてきた。2種目合計で競う団体決勝の結果は最下位の8位だったが、前の演技の採点が長引き、

●トランポリン

トランポリン、悲願達成に向けての課題と収穫

エースの伊藤正樹が出発直前の報道公開合宿において腰を痛めるアクシデントに見舞われる。悲願のオリンピックメダル獲得にもっとも近い選手ただだけに、関係者の中で大きな衝撃が走った。しかしこの危機的な状況が棟朝銀河という若い力を引き上げるにつながった。2008年北京大会で外村哲也が4位(3位との点差0.800)、2012年ロンドン大会で伊藤正樹が4位(3位との点差0.424)、そして今回も棟朝が4位(3位との点差0.640)とメダルを逃したが、



●新体操

新体操は次のステージへ

集中力を保つことの難しさや、どの国もミスが目立ち、現在の新体操が非常にレベルの高い拮抗した戦いになっていることに手ごたえを感じることができた。また、一人で挑んだ皆川夏穂の個人総合決勝進出はかなわなかったが、次のステージに進むための経験は十分に積めたと思う。



メダルまであと一歩のところには必ず日本選手がいることは、将来の日本トランポリンにとって重要な意味を持つてくるはずだ。また、怪我で心配された伊藤も6位と健闘。この経験値は次回2020年東京オリンピックの力になる。

以上、引き続き、皆様の温かいご支援ご協力をお願いし、2016年の体操ニッポンの振り返りとして。